



風土のちがい

今年も海外からの研修員をお迎えした。

当校では、30年前から国際協力事業団（JICA）と共同して、技術研修を担当させていただいている。今年の中南米・東南アジア・中近東・アフリカ各国からの18名で、6ヵ月と10ヵ月のコースがある。ともに、技術系の高校、専門学校などの先生で、30歳前後の方である。

私は、いつもはじめに、専門の技術の勉強だけではなく、日本という国や日本人を、ありのままを見てほしいとお願いしている。そして、めでたく修了のときをお迎えになったとき、副産物として最初にお願いをした「日本」についての感想をおうかがいするのを楽しみにしている。

この頃になると一仕事終えた安堵感もあって、打ち解けた本音の感想や質問をしていただける。

もとより、皆さん紳士なので、定番の経済力、技術力、勤勉性、時間の正確さ、物価など社交辞令も込めての感想が多い。それはそれでありがたいが、もう少し掘り下げてほしいと願います。

そして率直な声が出てくる。しかし、見得を切った報いとして、受け答えに苦しむ羽目になる。

曰く、「日本人は、貯金があるのになぜ働くんですか」「食べ物と家の値段は、とても信じられない」

これには戸惑った。貯蓄行動や物価は、さまざまな要因が作用して形成されている。短時間に、しかも通訳を介してしか話せないもどかしさもある。

「価値観の相違ですね」だけでは話にならない。

やはり、この種の疑問には、まず、わが国の風土から説明しなければならない、と意気込む。

日本は、国土の狭い国ですが、うち70%は急な山地で、人が住めません。残りのわずか30%の中で1億2000万人もが暮らしています。

毎年、台風がやって来ますし、体を感じる地震だ

けでも年に1000回もあります。気温は、赤道から北極くらいにまで変化します。

私たちの祖先はここで米を作るなど、農耕によって営々と生きてきました。天候によっては、全く収穫のない年もありました。働くことと、不時などに備えて、「貯えておくこと」が習性となっていたのです。

現在の私たちには、依然として、この農耕民族の血が脈々と流れているんです。

130年ほど前、大きな変革の時期がありました。資源は乏しい国ですが、当時の西洋文明に習い、工業化を推し進めました。農地が工場や道路、住宅などに変わっていったのです。結果、米以外の食料は大部分を海外から買っています。野菜や魚は鮮度が命なので空輸しています。

狭い都市の中で大勢が活動しますので、土地は金と比べられるほど高価です。昔、日本の家は木と紙でできているといわれました。地震や台風、火事に怯えて暮らしてきたので、これらに耐えられる丈夫な家に住みたい、という強い願望を持っています。

建物には大変厳しい基準の法律があります。今は、建設用の砂まで海外から買っているんです。

というような風土起因説めいたことを話したものの、世界には、われわれよりもっと苛酷な環境の国がたくさんある。事情の一端は、話としてはわかっていたただけとしても、はたして今の世界に通用するだろうか。

なかがわ かつひろ

略歴 昭34 大阪府職員採用

各部局で行政事務に携わる

昭62 雇用促進事業団の大阪勤労者職業福祉センター（オオサカサンパレス）の創設に参画

平9 現職